

# イラク医療支援にかかわって

2005.10.23 小野 万里子

## 1. セーブ・イラクチルドレン・名古屋の活動内容

- ・イラクの病院へ医薬品贈呈  
バスラ、バグダッド、ナシリア、ファルージャ、ヒッラ、ラマディなど、約 1500 万円分
- ・同、医療機器贈呈  
バスラ、ヒッラ、ハディーサ、モスルなどへコンテナ4本分
- ・イラク人医師の日本での研修
- ・医療機器技術者の日本での研修
- ・白血病の子ども(アッバース君)の日本での治療
- ・「イラクを伝える」活動ー各種講演会の実施、学校授業受入れ等

## 2. イラクにかかわるきっかけ

- ・03年2月 イラク戦争直前のイラク訪問
- ・大国による戦争被害の特殊性を知る
  - \*戦争被害が、「戦場を越える」(時間的、場所的)
    - ー湾岸戦争後も殺され続けるイラクの子どもたち
    - ー劣化ウラン弾使用地域における小児がんと奇形出産の急増
    - ー身をもって示される、現代型戦争への警鐘
  - \*戦争被害の構造的隠蔽
    - ーイラクの悲劇はなぜ伝えられないのか
    - ー劣化ウラン被害の因果関係立証の困難性
- ・日本の特殊性を知る
  - ー「ヒロシマの国、テクノロジーの国、平和を愛する国」

## 3. 名古屋の活動の特徴

- ・基本は「イラクからの声を聞く」
- ・「日本国内」でもできる活動
- ・「地方の優位性」を生かせる活動
- ・医師の方々 & 病院、メーカーの協力  
愛知県保険医協会、名大病院、愛知医大病院、名市大病院その他
- ・人と人がつながる支援
- ・「武器を持たない支援」の持つ意味
  - \*ファルージャへの医療支援での経験
  - \*イラクで銃を向けられた実体験

## 4. 今後の展望

# 劣化ウラン汚染の地の人々とかかわって ～あるイラク医療支援活動の報告

小野 万里子

## 1. 2003年2月、初めてのイラク訪問

- ◇私は、名古屋市で弁護士をしている。私が、イラク戦争直前のイラク行きを決めたのは、国際法の危機の時代にあって法律家として何がしかの意思表示をしたいと思ったこと、大国の暴虐に生命を脅かされているイラク市民のありようをこの目で見たかったことによる。その意味では、「1回限りの自己完結型」の旅のはずであった。
- ◇しかし、イラクでの鮮烈な体験、見聞がその1回完結を阻んだ。イラク市民は、イラン・イラク戦争、湾岸戦争、経済制裁、その後も続く米英軍の空爆で疲弊しきっていたが、それでも快活で如才なく、この人々の上にミサイルが容赦なく打ち込まれることを想像すると胸が張り裂けそうになった。

とりわけ私に強い影響を与えたのは、イラクの病院での体験である。おびただしい数の奇形児たち、白血病患者、がん患者たち。がん病棟における低年齢患者の多さは異様であった。医師らは、口々に、湾岸戦争で米軍主体の多国籍軍により使用された劣化ウラン弾が原因であると指弾していた。たしかに、それはおそらくは真実だろう。

ただ同時に、私は、イラクの人々の因果関係立証の道の困難さを思わざるを得なかった。昔、私たち弁護士の大先輩たちも、水俣病やイタイイタイ病などの公害訴訟で、「原因物質との因果関係立証」のために血のにじむような努力を強いられた。

しかし、今、イラクの人々が直面させられているのは、それとは比較にならないほどの大きな壁である。

病院で「ヒロシマもかつて私たちと同じウラン放射能に苦しんだ。ヒロシマの復興は私たちの希望のシンボルである。」と訴えるイラクの人々に、私は会わせる顔がなかった。なぜなら、その「ヒロシマの国」こそが劣化ウラン兵器を使う戦争を経済的に支え、劣化ウラン兵器を打ち込む軍隊に出撃基地を提供していたのだから。

- ◇もうひとつ、国連による経済制裁の問題にも触れなければならないだろう。私も含め日本人の多くは、そしてアメリカ人のほとんどは、あの理不尽な経済制裁がどれだけ多くの無辜のイラク人々を殺し続けたかについて、あまりに無知である。食料、医薬品、基本インフラが国際社会に止められたことによって、幾百万の人々とりわけ子どもたちが犠牲となった。ある医師は、「もうウラン兵器使用の責任はとっていただかなくて結構。私たちは独力で子どもたちを助ける。その妨害だけはやめてほしい。」と吐き捨てるように言った。そう、イラクに劣化ウランの弾丸を撃ち込んだ連中は、自力で治ろうとする子どもたちの命をさらに奪おうとしている。

こんな非人道的なことがなぜ許されているのか……。あまりに問題が大きすぎて、「少しでも薬を届けられるように努力します。」と約束することが精一杯であった。

- ◇胸をえぐるような死にゆくイラクの子どもたちの姿は、湾岸戦争と経済制裁の犯罪性を鋭く告発すると同時に、地球の将来に警鐘を鳴らしているようにも見えた。取り返しのつかない環境汚染を前に、彼らは生き残っている私たちに何をすべきかを教えてくれているようにも思われた。

## 2. 「セイブ・イラクチルドレン・名古屋」の立ち上げと初期の活動

- ◇帰国直後の2月25日、医療支援団体『セイブ・イラクチルドレン・名古屋』を立ち上げた。イラクで起きていることをマスコミが伝えないなら私が伝えよう。国際社会が経済制裁によって恣意的に医薬品を制限するなら、私は私のやり方でイラクの医療現場が求める薬を届けよう。たった1つの命でも救うことができるならそれだけでも十分意味はある……。

◇「たった1つの命でも」と始めた小さな活動を、名古屋地区の多くの方々が支援して下さった。まず最初に強力な援軍となったのが、小さな子どもを持つ母親たちである。そこから口コミで支援活動が広がっていった。さらに、「生徒たちに、平和の尊さ、命の重さを知ってもらいたい」という先生方に。そして、当の感受性鋭い生徒たちに。人の命を預かる医療関係者たちに。「殺すなかれ」と祈る宗教者たちに。名古屋だけではなく、多くの人たちがこの活動に関わるようもなった。募金額は、半年たらずで500万円を軽く超えた(2年間で約 5000 万円弱)。募金用の郵便振込票の多くが、平和を願うメッセージで埋め尽くされていて、イラクの子どもたちに寄せる多くの日本人の思いを痛感する毎日が続いた。

◇イラクの病院から支援医薬品リストを作ってもらい、それを予算の範囲内でヨルダンで購入し、イラクの病院に届ける。といっても、イラクを往復できる常勤スタッフがいるわけではないので、日本人ボランティアや報道関係者がイラク入りするときに、ついでに病院へ届けてもらうという原始的なやり方であった。ともかく、「イラクの病院へ薬を届けること」が初期の活動の全てだったのである。

03年の夏ころになると、医薬品という「物」だけをポーンと送る活動に、これだけでいいのかとの疑問も出てくるようになった。何というか説明が難しいのだが、「人同士が理解し合って親しくなっていける」という感覚がいっこうに持てないことに一抹の空虚感を覚え始めていた。

そんなとき、薬を送る活動で親しくなったイラク人医師たちと名古屋で話し込む機会があり、彼らも、「物」を送るだけにとどまらない、人と人とが交流できる支援のあり方を望んでいることがわかった。それが、イラク人医師の日本での研修、白血病患者の日本での治療(アッパーズ&ドクターズ計画)に取り組むきっかけになった。イラクは、もともと中東随一の医療先進国だったが、湾岸戦争後の経済制裁により、医療技術も医療機器及び医薬品の整備も止まってしまっていた。世界標準の症例分析、臨床とも導入できておらず、イラク標準が世界標準としては過去の遺物的であるという場面にも彼らは名古屋でしばしば遭遇した。あるステージの白血病患者は日本だと100パーセント近く治るのに、イラクでは8割以上が救命できない。名古屋の血液病基幹病院を見学した医師たちが、がん患者の激増に直面して「目の前のこれが世界標準ならば、イラクの今後を担う若手中堅医師たちを、ここで腰を据えて教育してほしい。」と願うのは、現場の専門家としては当然の希望でもあった。

### 3. アッパーズ&ドクターズ計画

◇アッパーズ君は、当時5歳。高度放射能汚染地域のバスラで生まれ育った。父アリさんは、湾岸戦争の戦車部隊にかり出され多国籍軍の劣化ウラン弾攻撃を浴び、帰還後は体調不良に悩まされ続けている。アッパーズ君はあらゆる意味で、現在のイラクに多発している白血病人たちの典型であることから、私たちは彼の治療受入れを決断した。

医師らは、バスラの血液内科アサード・カラフ医師とバグダッドの小児科モハメド・ハッサン医師の2名。いずれも、白血病治療の最前線で奮闘している30代前半の志高い青年医師らである。イラク戦争でも大量に劣化ウラン弾が使用されたため、今後のがん患者、白血病患者の急増は避けられない。その対処法として充実した研修による医師育成を今から準備しておかなければならない。それがイラクの病院側の切実な希望であった。

幸いにも、白血病治療の分野で世界のトップクラスと目される名古屋大学医学部附属病院がこれを引き受けてくれた。指導責任者の小島誠二教授らの「国籍を問わず、私たちの力を必要としている人々がいるのであれば、力をお貸ししましょう。このような形で国際貢献できることを光栄に思います。」との言葉に、医療者の良心を感じ胸打たれた。

◇イラク人医師と患者親子は約1年名古屋に滞在した。

日常的ふれあいの中で、私たちは互いに、各々の国の生活様式や文化を学び合うことになった。中東に欧米の価値基準を強制することは間違っている、と、私は改めて思い知らされた。私だ

けでなく、名古屋の多くの市民が、この4名のイラク人の姿を通してイラクという国を見るようになったし、アッバース君のツルツルの頭(抗がん剤のため脱毛している)や大きなクリクリとした目を通して劣化ウラン弾を知ることになった。テレビや新聞は爆撃場面ばかりを取り上げるが、生身のイラクはそれだけではないのだと知ってもらえた。思わぬ、そして貴重な副産物であった。

◇両国の病院事情をよく知るイラク人医師が名古屋に滞在していることにより、イラクへの医療支援も飛躍的に充実した。たとえば、中古の医療器械をイラクに送り生かす、という支援方法も彼らの発案によるものである。

◇彼らは、医療研修だけではなく、日本全国各地にイラクの実態を伝える活動にも積極的に取り組んだ。彼らの訴えに心を動かされた広島市民団体が、イラクで小児がん治療の最前線に立つフサーム医師の広島大学付属病院での研修を実現した。そして、フサーム医師のアレンジにより医薬品や医療機器をイラクに届ける活動にも取り組んでいる。同じく長崎市民団体は、2名の医師を長崎大学付属病院での研修に招聘している。

広島の人々も長崎の人々も「名古屋がこんなに取り組んでいるのに、被爆地が知らんぷりではいけない。ヒロシマ・ナガサキだからこそできる支援に取り組もう。」と意を決したそうである。さらに、北海道市民団体は、ナッシリアへの医療機器贈呈に取り組み、すでにバスラおよびナッシリアの病院でこれらの医療機器は活用されている。今後は、ナッシリアの病院から依頼されている医師研修にも取り組む予定で、札幌市内の受入れ病院もすでに内定しているとのことである。

名古屋在住の彼らの努力が、全国各地にイラク医療支援グループを生み出していったのみか、日本の一般庶民と変わらない等身大のイラク人の姿(がん克服に取り組む医師がいて、小児がん患者がいて、子どもの全快のために全人生をかける母親がいる)が日本全国の人々に広く伝わった。その意味では、たいへん見事な外交官ぶりだったと思う。

#### 4. 最後に

◇残念ながらアッバース君は、経過良好で帰国したにもかかわらず、帰国後4ヶ月目の05年2月に急死した。私たちは、イラクの戦争後遺症の大きさをあらためて思い知らされた。

イラク戦争で市街地に大量に投下された劣化ウラン弾は、あと数年のうちにおびただしい数の「アッバースたち」を生み出すだろう。その事態を前に私たちは何ができるのだろうかと自問自答する日々でもある。

劣化ウランの半減期は45億年。アメリカという超大国は、イラクの大地に引き起こした、このあまりに罪深い現実と今後どのように向き合っていくつもりなのだろうか。

#### 〈私のプロフィール〉

1954年生まれ。東北大学法学部卒業後、社会人生活を経て、1990年名古屋市にて弁護士登録。主として、消費者問題、女性差別問題にかかわる。2003年2月以降現在まで、セイブ・イラクチルドレン・名古屋代表。小学生と中学生の2児の母。